

表1 関東大震災の経緯とプールの逃避行の時系列, 9月1日未明から15時まで (相原, 2017, 井上, 2019を修正)

	推定時刻・天候, 地震・火災の状況	場所・船・建物, 道路・壁の状況	O.M. プールの行動, 他の人の動き
	前日夜: ひどく暑苦しく、うとうとしかった	8月31日(金)は休日、軽井沢・箱根などに避暑に行っている人も多かった。	
地震前	3時: 夏台風襲来、強風と豪雨が降ってきて、2-3時間続いた。	我が家の2階のベランダが水浸しとなった。	プールとドロシーは目をさまして、びしょぬれになりながら、横引きの窓を閉じて、夏台風をしのいだ。
	6時~7時: 曇り	山の手68番地自宅	ドロシーと3人の子供たちと朝食を取り、8時頃家を出て、百段を降り、中華街を通過して、ドットウエル商会の事務所に向かった。
地震後1時間	10時~12時: 晴れ時々曇り/温室のような暖風	71番地ドットウエル商会事務室の椅子、新築の2階建て木造、壁は石積で花崗岩を含むセメントで上塗り。	土曜日なので帰る準備を始め、隣のビルの友人スコットへ窓越しに昼食に行く合図をした。
	11時58分: 前兆無く激震発生。地鳴り、建物梁のきしみ、床の隆起、横揺れが30秒間続いた。	崩壊、漆喰のかけらが天井から落下、ほこりで見通しが悪く、息が詰まる。壁ははらみ出し倒れかかる。机は移動し、筆筒や金庫は倒れる。	プールはむかつくような強い揺れを感じた。
	ここまで4分: 突然の静寂	プールの会社の建物自体は倒れず、真直ぐに立っていた。	プールは社員全員の安全を確認した。外に出るように指示、トムソンが車から戻る。2階の部屋に行き、上着と帽子を取る。
		回りの建物はすべて倒壊していた。街路は3mもの厚さの瓦礫で通行できない。	プールたち3人は正面玄関から外に出た。
		瓦礫に埋った車に遺体がある。余震で再び瓦礫が崩れかかる。空中に漂う黄色いほこりがあった。	プールは45m先にアンダーソンを確認した。
地震後2時間	13時少し前: 下方北方の日本人町から黒煙が這い上がってくる。	チャイナタウンは通行不能、加賀署を越えた100ヤード(91m)区間は道路が沈降して泥沼となっていた。	アンダーソン、ペイトマンが先に泥沼を渡る。プールはその後で泥沼を腰まで浸かって乗り越える。
	強い余震	西の橋付近の崖地はすべり落ちていた。各地で地すべりが発生し、崖上の外国人の家は倒壊していた。	四つん這いになって鉄の橋を渡り元町方面に行く。
		元町の80ヤード(72m)後方で突然発火し、赤茶けた炎が旋風となる。	プールたちは凹んでいる溝状(街路)のところを瓦礫をかき分けて、400mほど歩いた。数歩歩くごとにボロをまとった人影が立っていた。
		炎が足元を舐めるように這ってくる。	もっとも安全な代官坂を上る途中に開いていた食料品店で缶詰などを購入した。他の2人を見失い、代官坂を登る。
	強い余震	丘の頂上へクト山の頂上では、平屋2軒が倒壊していた。坂の斜面を見ると多くの人家が崩れ落ちていた。	代官坂を半分登ったところで、強い余震を受ける。山手107番に向かい、外人墓地の丘を登る。
地震後3時間		山手68番地の手前130mの山手通り	シャープに出会い、68番地の自宅は倒壊していないことを知る。
		山手68番地の自宅	自宅は崩れかけているが、しっかりと建っていることを確認する。下男の子が立っていて、家族の無事と避難した方向を聞く
		総合病院と修道院の小道に向かう。	尼僧に逢い助けを求められるが、妻と家族を探していると伝える。
		13時少し前: 下方北方の日本人町から黒煙が這い上がってくる。	
	強い余震	家パンケーキのように倒壊していた。	プールは坂道で滑り落ちた。元来た道を戻った。
地震後3時間	13時過ぎ: 息が詰まるほど暑くなる。頭上にあった煙が下りてきた。	山手89番地、アンダーソン家	妻と子供たち、お手伝い、祖母夫妻、アンダーソン家族、キング家族など(14人)と再会できた。
	1分か2分後: 強い余震	余震後偵察に行くと、米国・英国病院の建物の多くは倒壊していた。	義父キャンベルと打ち合わせて、仏波止場に停留しているダイミョウ号に避難することを決める。
	数分毎: 余震発生	英国病院のテニスコートには、芝生に無数の亀裂が発生していた。	プールはアンダーソンと偵察に行くと、英国病院のテニスコートに避難者がいた。家族は一段低い庭にいた。
		山手の南側の窪地には天沼の集落があったが、火の手が上がり南には行けない。	英国海軍病院(現在の港の見える公園)の庭に避難して野宿するとすれば、シーツと食料と水が必要だが、手配できず、炎が襲ってきた。
		キャンプヒルを下って海岸通りから仏波止場に行こうとしたが不可能であった。	段々の庭から英国水兵の助けをかりて、テニスコートにあった網を東屋に括りつけて崖上から垂らして固定した。崖の半分ほどに達した。
地震後3時間		崖の中腹には湧水があり、軟弱で子供を負ぶっては降りることができなかった。	順次網を伝って降りることにする。網の下で子供を受け取るため。妻ドロシーが先に下りる。プールは3人の子供を負ぶって崖を降りることができた。義父キャンベル夫妻なども順次降りることができた。
		崖下に降りた数分後: 赤く燃えて流れて来る煙が崖上の避難者を襲った。	プールは長男を負ぶって湧水地点まで来て長男をおろし、湧水地点の反対側から長男を飛び越えさせることができた。外国人の全員は、崖下の埋め立て地になんとか降りることができた。
		埋立地は重苦しい熱煙に覆われた。元町から2000人以上の日本人が逃げた。	プールたちは海岸付近で病院のシーツを見つけて出し、風よけを作った。真水を運ぶはしけを見つけ、全員で手柄勺で水を受け取った。